熊本大学教育学部紀要
第65号, 65 − 72, 2016

英語史における/k/と/g/の口蓋化について*

松　瀬　憲　司

On the palatalization of /k/ and /g/ in the history of English

Kenji Matsuse

(Received September 30, 2016)

In English there are pairs of semantically related words in which the one has gone through both palatalization and assibilation (Palatal Softening), while the other has not: for example, *speech* vs. *speak*, Old English *giefan* vs. *give*, etc. Among the conditions that trigger both sound changes, the existence of front vowel(s) before or/and after the /k/ or /ɡ/ sound involved and what we call *i*-Umlaut are very crucial. In addition, the reason why the palatalized and assibilated /ɡ/ in Old English *giefan* has been replaced by the original /ɡ/ in Present-Day English *give* cannot be accounted for by a sound change theory, but by a sociolinguistic point of view; *give*, a word borrowed from Old Norse, has been adopted into the standard variety of English instead of the native word *giefan*. And we also find *tush*, which has changed the original /sk/ sound of Proto-Germanic **tunþskaz*, as a dialectal variant in tandem with *tusk*, which has not and was taken into the standard English. This fact suggests that it just happened in the history of English that the former is regarded as a vernacular form and the latter a standard one; it just depends upon our selection whether they become a standard variety or not.

Key words : palatalization, assibilation, *i*-Umlaut, variant, standard vs. vernacular

1　はじめに

「口蓋化（palatalization）」は，厳密には「硬」口蓋音化と言うべきで，以下竹林（1996: 100）によれば，

（1）硬口蓋音（palatal）[破裂音・閉鎖音 /c, ɟ/，鼻音 /ɲ/，摩擦音 /ç, ʝ/，接近音 /j/，側面接近音 /ʎ/] 以外の子音が前舌母音，特に /i/，/j/ の前の調音において前舌が硬口蓋に向かってもり上がる現象で，硬口蓋音化を受けた子音の音色は硬口蓋音同様 /i/ の母音のような明るさを帯びる．

とされ，日本語では，「ピ」や「ミ」などの子音 /p/，/m/ が常時口蓋化を受けており，現代英語（Present-Day English: PDE）では，いわゆる「明るい L」と呼ばれる，leaf の /l/ がこれに当たる．

しかし，より一般的には（竹林 1996 は「多少不正確な使い方である」としているが），

（2）/k/，/ɡ/ などの軟口蓋子音の調音位置が隣接する前舌母音の影響で前寄りになること

を示すときに使われ，日本語の「キ」や「ギ」などの語頭子音は，上記「ピ」・「ミ」同様この口蓋化を受けている．また，PDE の cat が日本語で「カット」ではなく「キャット」と拗音で音写されるのは，語頭の /k/ が後続の前舌母音 /æ/ によって口蓋化を起こしていることを如実に物語っている．[1] この口蓋化も含めて，言語音が連続するとき，ある音の調音が隣接する音に影響され，その音本来の調音と同時に隣接の音に類似した調音を行うことを「副次調音（secondary articulation）」と呼ぶ．

英語史的観点に立てば，特に後者の口蓋化は，それがさらにある特殊な環境に置かれた場合，調音のみならず，音そのものが変質することがある．これがいわゆる「同化（assimilation）」である（竹林 1996: 101）．古英語（Old English: OE）の音韻体系では，<c> と <g>（もしくは <ȝ> ‘yogh’）の書記素（grapheme）で表される音韻は母音との組み合わせによって変化し，次のように実現される．

（3）a. <ca, ce, ci, cu, co> = [kɑ, (ce >) tʃe, (ci >) tʃi, ku, ko]

b. <ga, ge, gi, gu, go> = [ɡɑ, (ɟe >) je, (ɟi >) ji, ɡu, ɡo]

すなわち，軟口蓋破裂音 /k/・/ɡ/ が前舌母音と共起すると，口蓋化で留まるのではなく，音そのものが破擦

音（affricate）[2] や接近音（approximant）にまで変化し，いわゆる「音素化」してしまっているのである．児馬（1996: 54）はこのこと（特に 3a）について，次のように述べている．

（4） OE 以前から <c> の綴り字は原則として [k] と発音していたと考えられている．…しかし，4，5 世紀頃に口蓋化（palatalization）という音変化が始まって，[k] 音の前後に前母音が生じているときに，その [k] の調音点が前に移動し [c] 音になった．この [c] 音は，さらに，11 世紀までに擦音化（assibilation）といって，直前に [s] 音がある時には [ʃ]，無いときには [tʃ] という擦音（sibilant）に変わった．[3]

その結果，OE の（5a）cirice ‘church’ と（5b）scip ‘ship’ は次のような音変化を起こしたと考えられている．

（5） a. [kirike] > [cirice] > [tʃiritʃe] (> PDE [tʃə:rtʃ])
b. [skip] > [scip] > [ʃip] (= PDE [ʃip])

（5b）に関しては特に，「口蓋化＋擦音化」を受けたアングロサクソンの OE とそれを受けなかったヴァイキングの古ノルド語（Old Norse: ON）がデーンロー地域で接触・共生した結果，最終的に英語語彙に **sh**irt / **sk**irt のような「二重語（doublets）」が生じた点で，英語史的には非常に重要な音韻変化と言える（児馬 1996: 55 参照）．ただし，同じ OE でも，北部方言では，オリジナルの /k/ は温存されたようで，現存する PDE の kirk ‘church’ という単語にその名残を見ることができる（この場合も，当然口蓋化自体は起こっていたと言わねばならないが）．*OED*[2]（s.v. *kirk*，1a，b）には，次のような記述がある．

（6） The Northern English and Scotch form of the word CHURCH, in all its senses. In Northern English: formerly used as far south as Norfolk; and still extending in dialect use to north-east Lincolnshire. Used in literary Sc[ottish] till 17th c[entury], and still retained in vernacular use in the general sense of ‘church’.

そこで，本稿では，/k/ と /g/ からこのような口蓋化（及びその後の音韻変化）によって生じた音韻 /tʃ/ と /j/ を持つ単語が PDE 標準形内でどのように分布しているのか，その音韻変化を受けなかった単語の存在と対比しつつ，まずその実態を確認し，各単語が持つ音韻に関して通時的考察を試みたい．本稿の構成は次の通りである．次節では，無声軟口蓋破裂音 /k/ と無声硬口蓋歯茎破擦音 /tʃ/ のペアを取り上げ，3 節では，有声軟口蓋破裂音 /g/ と有声硬口蓋接近音 /j/ のペアを議論する．さらに，/sk/ に生じたいわゆる擦音化に関しても，4 節で検討する．そして最後の 5 節で全体の議論をまとめることにする．

2 無声軟口蓋破裂音 /k/ vs. 無声硬口蓋歯茎破擦音 /tʃ/

堀田（2009）は，意味的に関連しあう，無声軟口蓋破裂音 /k/ の口蓋化とその後の擦音化で英語に生じた破擦音 /tʃ/ を含む単語と，その「口蓋化＋擦音化」を受けず，軟口蓋音 /k/ を温存した単語のペア（斜線の左側が /k/ を持つ「動詞（不定詞）」，右側が /tʃ/ を持つ「名詞」）[4] として以下のものを挙げている．

（7） bake / batch; break / breach; make / match; speak / speech; stick / stitch; wake / watch

これらのペアは（8）のように OE 期から存在していたもので，その状況は PDE 標準形にまでそのまま受け継がれていると言っていい（*印が付いた形は再建形を示す）．

（8） bacan / *bæcce; brecan / brice; macian / (ge)mæcca; specan / spæc; stician / stice; *wacan / wæcce[5]

そして上例（8）から以下のことが明らかになる．

（9） a. 口蓋化＋擦音化を受けた名詞形（(ge)mæcca を除く）は <c> の前後に前舌母音のみが生じている．
b. bacan，*wacan は <c> の前後に前舌母音ではなく，後舌母音が生じているので，そもそも当該の /k/ に口蓋化は起きていない．[6]
c. 動詞形 brecan, macian, specan と名詞形 (ge)mæcca [(je)mætʃɑ] は <c> の前後いずれかに前舌母音が生じており，その結果動詞の場合は口蓋化＋擦音化を起こしていないが，名詞の場合は口蓋化＋擦音化を起こしている．
d. 動詞形 stician [sticiɑn] は <c> の前後に前舌母音のみが生じているにもかかわらず，口蓋化に続く擦音化が全く起きていない（つまり [stitʃiɑn] になっていない）．

この中で特に，（9a）と（9d）は明らかに矛盾する事実であると言っていい．

そこで，OE の書記素 <c> が /k/（[k] または [c]）と発音される場合と /tʃ/ と発音される場合に関して，デイヴィス（1978[7]［1953[9]］: 3-4 & 137）がそれぞれ以下の（10）と（11）ようなルールをあげているので，まずそれらを

確認してみることにする（用例は筆者が追加したものもある）.

（10）a. <c>［語頭］＋後舌母音（または /y, y:, e, e:/）　ic cann [**k**ɑn] ‘I know’; cyning [**c**yniŋg] ‘king’
b. 後舌母音（または /y, y:, æ/）＋ <c>［語尾］　bōc [bo:**k**] ‘book’; bæc [bæ**c**] ‘back’
c. <c>［語頭］＋子音　cnāwan [**k**nɑ:wɑn] ‘to know’

（11）a. <c>［語頭］＋ /i, i:/（または /e, e:/）　cild [**tʃ**ild] ‘child’; cēosan [**tʃ**e:ozɑn] ‘to choose’
b. /i, i:/（または /e, e:/）＋ <c> ＋ /i, i:/（または /e, e:/）　micel [mi**tʃ**el] ‘much’
c. /i, i:/（または /e:, æ:/）＋ <c>［語尾］　lic [li:**tʃ**] ‘body’; spæc [spæ:**tʃ**] ‘speech’
d. /n/（または /l/）＋ <c>［語尾］[7]　stenc [sten**tʃ**] ‘stench’; ælc [æ:l**tʃ**] ‘each’

しかし，この（10）と（11）だけでは，上記（9b）以外の状況を十分に説明することができないことは明らかである．問題点は次の二点に絞られるだろう．

（12）a. <c> の前後いずれかに前舌母音が生じる場合，擦音化が起きる条件は何か［=（9c）］.
b. <c> の前後両方に前舌母音が生じているにもかかわらず，擦音化が全く起きない場合の条件は何か［=（9d）］.

特に（12a）は，（10a）の「<c> の後に，ある種の前舌母音が生じるているにもかかわらず，擦音化が起きることなく，オリジナルの /k/ が温存される場合もある」ということもまた逆説的に示すので，cyning ‘king’ のような例を説明することにもなる．まず，このことから取り上げることにする．

デイヴィス（1978[7]［1953[9]］: 106-129）所蔵の glossary で，上記（10a）の連鎖「<c> ＋ /y, y:, e, e:/」を持ち，/k/ が温存されている単語をいくつか抽出してみると，以下のようなものがあった．

（13）**ce**nnan ‘to bear (child)’; **cē**ne ‘brave, bold, keen’; **Ce**nt ‘Kent’; **cy**nerīce ‘kingdom’; **cy**re ‘choice’; **cy**ssan ‘to kiss’; seol**ce**n ‘silken, made of silk’; tā**ce**n ‘sign, token’

これらについてデイヴィス（1978[7]［1953[9]］: 3 & 137）は，地名の Kent のように PDE においても /k/ が保持されている語は，OE でも /k/ が口蓋化のみを受けた [cent] と発音されていたと説明している．つまり，PDE での発音を元に OE での発音が特定されるということらしい．しかし，事実としてはそうだろうが，なぜそのようなことが言えるのだろうか．そこで，（13）の各語の音韻構成に着目してみると，（13）は <cy-> と <(-)ce-> に分類され，後者がさらに <ce-> と <-ce-> に分類できることが分かった．

ここで，（13）の各語の語源を寺澤（1997）等を参考に（14）に掲載する（*印が付いたものはゲルマン祖語および印欧祖語再建形である）.

（14）**ce**nnan < P[roto-]G[er]m[ani]c. *kannjan; **cē**ne < PGmc. *kōnjaz; **Ce**nt < L[atin] Cantia; **cy**ne- < PGmc. *kunjam; **cy**re < PGmc. *kuziz; **cy**ssan < PGmc. *kussjan; seol**ce**n < L sēricus; tā**ce**n < PGmc. *taiknam < P[roto-]I[ndo-]E[uropean] *deik- ‘to show’

（14）を一見してまず分かるのは，語頭の <cy-> と <ce-> の前舌母音は *i*-Umlaut/i-mutation（Quirk & Wrenn 1994［1957[2]］: 17; Lass 1994: 59-71; Hogg 2002: 47; Baker 2007[2]: 17-18）によって，それぞれオリジナルの後舌母音 /u/ と /a, o/ に引き起こされた音変化であるということであり，その結果確かに <c> に口蓋化は起きているが，おそらくこの *i*-Umlaut が何らかの障壁になり，擦音化にまで至っていないものと考えられる．また，語中の <-ce-> の連鎖の場合は，seol**c** + **e**n ‘silk + -en’（< sēri**c**- + -us）および tā**c** + **e**n ‘tok- + -en’（< *tai**k**- + -nam < PIE *deik-）と分析され，語の主要要素が /k/ で終わる（音節の最終音が /k/）という事実から，同じく <c> に口蓋化のみが生じ，擦音化していない可能性が導き出される．つまりこれは，この音韻環境では，*i*-Umlaut は口蓋化は引き起こしても擦音化には関与せず，また，音節の境界に /k/ が生じている場合も，擦音化に至らないということを表していると考えられる．

次に，（12a）と（9c）について，brecan [brekɑn]，macian [mɑciɑn]，(ge)mæcca [(je)mætʃɑ] を取り上げ，議論する．おそらく，ここで特に明らかにすべきは，「前舌母音 + <c> + 後舌母音または後舌母音 + <c> + 前舌母音の環境では原則として，<c> = /k/ となる一方，前者の前舌母音 + <c> + 後舌母音の環境においては，<c> = /tʃ/ になる場合もある」ということであろう．つまり，brecan と (ge)mæcca の関係である． 前者の brecan は，ゲルマン祖語形が *brekan であることから，上述の，擦音化にまで至らない「音節の境界での /k/ の保持」で説明されると思われる．他方，(ge)mæcca のゲルマン祖語形は *gamak(j)ōn であり，これから派生したもう一つの OE 形態としては (ge)maca [(je)mɑkɑ] ‘mate, equal’ もあった．このように，(ge)mæcca とパラレルに，/k/ が保持された (ge)maca も存在していたことが分かっている．それぞれ，(ge)maca が *gamakōn から派生し，(ge)mæcca は *gamakjōn から派生したのである．つまり，*i*-Umlaut が絡んで後者の (ge)mæcca ができたと考えられ，

そして最終的に PDE 標準形には，この (ge)mæcca の後継である match（発音は [mætʃ]）が持ち込まれたということになる．そしてこのことは，<c> を含む音節の母音が後続の音節の /i, j/ によって同じ *i*-Umlaut を起こす場合でも，「前舌母音 +（語尾の）<c>」の環境の場合，（14）で分析した「語頭の <c> + 前舌母音」の環境とは違って，擦音化が起こるということを示唆している．

これに対して，「後舌母音 + <c> + 前舌母音」の環境で /k/ を持つ macian は，ゲルマン祖語形 *makōjan から派生したもので，オリジナルでの後舌母音に囲まれた環境での <k> に口蓋化は起こりえず，そのまま /k/ が保持されてきたと考えられる．さらにまた，*i*-Umlaut も起こらなかったので，そのまま後舌母音の <a> /ɑ/ が保持されたのである．ただ，それら口蓋化や *i*-Umlaut を阻止した（Lass 1994: 67 に言わせれば，“They do not show ‘failed’ I[-]U[mlaut]; at the relevant time the root vowels were not in an IU context” ということになるが），/k/ の後続音節の <ō> /o:/ は，OE では完全に脱落してしまっていることから，macian という不可解な形態が生じているにすぎない．

では，（12b = 9d）はどのように説明されるのか．ここで問題となっている stician ‘to stick’ は，そのゲルマン祖語形が *stikōjan であることからわかるように，macian と同じくオリジナルでは <c> の後に前舌母音はなく，さらに音節の境界となっているために，/k/ が保持されたものと思われる．ちなみに，もう一つの名詞形である stick は sticca（< PGmc. *stikkōn）‘rod, twig’ から派生しており，当然のごとく /k/ が保持されている．この名詞形はもう一つのゲルマン祖語動詞形 *stikan ‘to pierce’ から派生している．これに対して，口蓋化＋擦音化が見られる stitch の方は，stice（< PGmc. *stikiz）‘a prick, stab’ から派生した．この場合，オリジナルのゲルマン祖語形でも <k> が前舌母音に囲まれているので，通常の上記（11b）のルールにより OE で口蓋化＋擦音化が生じたものと思われる．

ここまでの議論をまとめると，以下のようになろう．

（15）前舌母音が <c> の前後に起きる音韻環境において，<c> に口蓋化＋擦音化が生じるのは，語頭の <c> 以外の環境で，それに後続する音節において *i*-Umlaut が起きた結果生じた前舌母音が当該の <c> の前に生起する，match（< (ge)mæcca）や teach（< tæcan）などの場合である．

最後に，þencan [θentʃɑn] ‘to think’ の <-nc-> という連鎖について議論する．OE では既に口蓋化＋擦音化した /tʃ/ が現れているのに，PDE の think では /k/ となり，一見すると元に戻ってしまっているように見える．実は OE にはこれと同じような意味・形態を持つ動詞として þyncan [θyntʃɑn] ‘to seem’ もあった．それぞれのゲルマン祖語形は *þankijan と *þunkijan であり，OE では，明らかに *i*-Umlaut が起きた後に口蓋化＋擦音化が生じているのが分かる．そして前者の中英語（Middle English: ME）形はと言えば，直系の thenche だけでなく，後者との混交が見られる，thinche(n, thunch(e(n, think(e(n, thynken, thenk 等 /k/ を含む形態も現れて来ている（*MED*, s.v. *thinken*）．[8] つまり，この /k/ を持つゲルマン祖語原点回帰型は，OE 期に書き言葉標準形であった (Late) West-Saxon 以外の「方言形」として生じたと考えられ，そのまま ME へと受け継がれたのである．したがって，（15）には，「(Late) West Saxon では」という但し書きが必要になると思われる．

同様のケースが OE sēcan [se:**tʃ**ɑn] ‘to seek’（< PGmc. *sōkjan）と seek のペアにも見られるが，寺澤（1997, s.v. seek）は，後者の /k/ は直説法現在形の þū sēcst [se:**k**st] ‘you seek’ や hē sēcþ [se:**k**θ] ‘he seeks’ の /k/ に由来すると述べている．確かに，þencan も þū þencst [θeŋ**k**st] ‘you yhink’ や hē þencþ [θeŋ**k**θ] ‘he thinks’ と活用するので，これらから /k/ を持つ形態が生じた可能性も否定できない．ただし，同じ弱変化動詞第 1 類に属する tæcan [tæ:**tʃ**ɑn] の場合は，þū tæcst [tæ:**k**st] ‘you teach’ や hē tæcþ [tæ:**k**θ] ‘he teaches’ と活用するにもかかわらず，think や seek に当たる例えば *teak のような /k/ を含む不定詞形態が ME 方言形においてでさえもまったく見つかっていないことも事実である．[9]

これらは，*i*-Umlaut ＋口蓋化のみで擦音化を受けなかった変異形（variant）が今度はたまたま PDE 標準形にちゃっかり納まっているということを表している．つまりこの場合，OE での口蓋化＋擦音化が PDE では「脱擦音化」になっているように見えるという事実は，それ自体の音韻変化の結果ではなく，単なる「選択」の問題であったと言うことができる．このような「標準形（standard）対土着形（vernacular）」および「標準形自体の変遷」といった要素が PDE における，関連する語中の /k/ と /tʃ/ の分布に深く関与していたのである．

3 有声軟口蓋破裂音 /g/ vs. 有声硬口蓋接近音 /j/

OE の書記素 <g> は，音素としては /g/ を，異音としては [ɡ, ɟ, j, ɣ, x] を表していた．[10] 前述のデイヴィ

ス（1978[7]［1953[9]］: 4 & 138）や Smith（2009: 16）を利用して，上記（10，11）と同じく，主に <g> の前後に生起する母音が前舌か後舌かによってその発音が規定されるルールを（16）に提示する．異音 [ɡ]，[ɟ]，[j]，[ɣ]，[x] は，それぞれ（16a）から（16e）の環境で実現される（前舌母音を「前 V」，後舌母音「後 V」と表記し，主な例を挙げる．用例は筆者が追加したものもある）．

（16）a. <g>［語頭］+ 後 V および　gān [**ɡ**ɑ:n] ‘to go’，god [**ɡ**od] ‘god’，guma [**ɡ**umɑ] ‘man’
V + /n/ + <g>［語尾］および　geong [juŋ**ɡ**][11] ‘young’，lang [lɑŋ**ɡ**] ‘long’
<g> + 子音および　glæd [**ɡ**læd] ‘glad’
<g> + <g>　frogga [fro**ɡ**ɑ] ‘frog’
b. <g> + /e:，y(:)/　gēs [**ɟ**e:s] ‘geese’，gyrdel [**ɟ**yrdel] ‘girdle’
c. <g> + <i，e，ie，īe> および　gif [**j**if] ‘if’，giefan [**j**ievɑn] ‘to give’，gīet [**j**i:et] ‘yet’
前（後）V + <g> (+ /e/) および　byrig [byri**j**] ‘cities’，gyltig [ɟylti**j**] ‘guilty’，ēage [e:ɑ**j**e] ‘eye’
/r，l/ + <g>　byrgan [byr**j**ɑn] ‘to bury’，fylgan [fyl**j**ɑn] ‘to follow’
d. 後 V(+/r，l/) + <g> + 後（前）V　ēagan [e:ɑ**ɣ**ɑn] ‘eyes’，lagu [lɑ**ɣ**u] ‘law’，āgen [ɑ:**ɣ**en] ‘own’
hālga [hɑ:l**ɣ**ɑ] ‘saint’，beorgan [beor**ɣ**ɑn] ‘to save’
e. 後 V/ 子音 + <g>［語尾］　genog [jeno**x**] ‘enough’，burg [bur**x**][12] ‘city’

この /ɡ/ 対 /j/ の対立関係の場合，PDE においては <g> 対 <y> という書記素で表されるが，/k/ 対 /tʃ/ の対立関係に見られた，意味的に関連する単語のペアに類するものは存在しない．例えば，**g**et と **y**et は全く語源的に関連しない．そして通常語頭の書記素 <y-> には /j/ が，語尾の <-y> には /i/ が統一して音価として与えられているが（例外は gif ‘if’ などで，語頭の /j/ が脱落して継承されている），語頭の <g-> は，[ɡ] を表すだけでなく，多少複雑な様相を呈する．

（17）a. <ya，ye，yi，yu，yo> = [jɑ，je，ji，ju，jo]
b. <ga，ge，gi，gu，go> = [ɡɑ，ɟe/dʒe，ɟi/dʒi，ɡu，ɡo]

このように，明らかに OE 時代には存在しなかった **ge**neral や **gi**ant といった，<ge-> や <gi-> で始まるフランス語からの借入語を通して，英語の書記素 <g> は，「語頭での」有声硬口蓋破擦音 /dʒ/ を獲得したと言っていい．[13] そして今や <g-> が前舌母音と共起するときには（アルファベット読みで <G> は，[ɟi:] ではなく [dʒi:] であるように），/dʒ/ が規則であると言えるまでになってしまっているが，いくつか例外がある．それは，上記（16b）と（16c）でも取り上げた単語に見られる，PDE の **ge**ese [ɟi:s] や **gi**ve [ɟɪv] の口蓋化した /ɡ/ である．（16c）から分かるように，OE では，通常 <ge-，gi-> は既に有声硬口蓋接近音 /j/ にまで変容してしまっているわけだが, gēs は /ɡ/ が口蓋化した [ɟ] の段階で留まっている．PDE でも事情は同じで, 事実 geese（< gēs）は，接近音化まで進んだ *yeese には至っていない．この geese は，OE 期より変わらず gōs ‘goose’ の複数形として残り続けているもので，いわゆる *i*-Umlaut によって生成された複数形である．同様に gyrdel ‘girdle’（実際には [ɡə-] であり，[ɟi-] そのものとして残存しているわけではないが）も，そのゲルマン祖語形は *gurdilaz であるので，*i*-Umlaut が起きていることは明白であり，ここでも *i*-Umlaut が語頭音節の音変化を口蓋化の段階のみで押し留める現象が確認できるのである．後者の give の場合は，音韻変化によって OE の /j/ が PDE の [ɟ] に変化したわけではない．松瀬（2011: 82）で議論したように，この give は ON からの借入語であるからだ．これに対する英語の本来語としては，（16c）にある口蓋化＋接近音化した /j/ を持つ giefan からの発展形である yēve(n や yive(n が ME では使用された（*MED*, s.v. *yēven*）．しかし最終的には，口蓋化のみの段階で留まっている ON 借入語の give が PDE 標準形に継承されているに過ぎないのである（get についても同様の理由で，本来語形の gietan [jietɑn] に代わって PDE 標準形に採用されているだけなのである）．

4　<sc> の発音：/sk/ vs. /ʃ/

最後に，いわゆる擦音化，すなわち /sk/ > /ʃ/ を議論する．Lass（1994: 58）は，この音韻変化について “The mechanics are not clear, ... The reason for this palatalization is obscure.” としながらも，次のように考えている．なお，（18b）では，口蓋化そのものが起きていない．

（18）a. [ski] > [sci] > [sçi] > [ʃi]
b. [sk] > [sx] > [ʃ]

ただ，いずれの場合も [k] が摩擦音化することによってその前に生じる摩擦音 [s] に影響を与えていると言える．（18a）に関しては，Horobin（2010: 129-130）が OE の女性単数三人称代名詞 heo から she が派生したことを説明する際に示した音韻変化，[hj-] > [ç-] > [ʃ-] を思い浮かべてみると，もっともらしい変化であると思われる．他方，（18b）に関して Lass は，現代のゲルマン語系言語における ‘to write’ を表す語では，スウェーデン語が **sk**riva [sk]，オランダ語が **sch**rijven [sx]，そしてドイツ語が **sch**reiben [ʃ] となっていることから，（18b）の音韻変化の流れが確認できるとしている．これに対して，Schreier（2005: 42-43）によれば，オランダ語が基盤となった南アフリカのアフリカーンス語（Afrikaans）では，この子音結合 [sx] に「異化（dissimilation）」が起こり，元の [sk] へ回帰しているので，（18b）に見られる [ʃ] への変化は絶対的なものではないことも分かる．

ところで，デイヴィス（1978[7] [1953[9]]: 4 & 138）では，OE における <sc> の発音について以下のように説明されている（用例は筆者が追加したものもある）．

（19）a. 外来語 <sc> = /sk/　　scōl [**sk**o:l] ‘school’，Scottas [**sk**ottɑs] ‘Scots (Irish)’
　　b. 後舌母音 + <sc> = /sk/　　āscian [ɑ:**sk**iɑn] ‘to ask’，tūsc [tu:**sk**] ‘tusk’
　　c. 上記以外の <sc> または <sce> = /ʃ/　　scip [**ʃ**ip] ‘ship’，fisc [fi**ʃ**] ‘fish’，sc(e)olde [**ʃ**olde] ‘should’

（19a）からすると，外来語の「語頭」に <sc> が生じている場合に /sk/ と発音されるというルールになりそうだが，muscelle [mu**ske**lle] ‘mussel’（< L mūsculus）等の例もあるので，語頭には限らなかったようだ．（19b）では「後舌母音」としか記述されていないが，/sk/ が保持されるのは，どうやら後舌「長」母音の場合と見ていいだろう．Lass（1994: 59）によれば，特に後方に <sc> が生じる場合は，/sk/ の維持がなかなか難しかったようで，（19b）の āscian や tūsc は，往々にして「音位 / 字位転換（metathesis）」を起こし，ā**x**ian や tū**x**as と <x> で綴られ，/ks/ の音価を持ったという．同じ後方の環境でも，/ʃ/ で定着した感がある前舌母音を伴う <-isc> だが，例えば fisc は，10 世紀のヴェルチェッリ写本所蔵 OE 詩 *Andreas* には，fisces [fi**ʃ**es] だけではなく，fixum [fi**ks**um] という /sk/ の音位転換形 /ks/ を含むものも見られるらしい．ということは，当時の fisc の発音には，まだ幾分か /sk/ の発音が残存していたのではないかと Lass は推測している．逆に，例えば PDE 標準形の dusk については，OE 期から *dusc が存在していたわけではない．OE 期に存在したのは，むしろ do**x** ‘dark-haired, dusky’ の方であった（Hall 1960[4]）．この /ks/ に音位転換が生じ，現在の /sk/ 形ができあがっているのである．ちなみに，musk もフランス語 musc からの借用で，ME 期に muske や musce として現れるが，OE から *musc があったわけではないことが分かっている（*MED*, s.v. *musk*）．最後に，実は（19c）以外にも /ʃ/ が現れることがあることを指摘しておく．例えば，fersc [ferʃ] ‘fresh’ である．そのゲルマン祖語形は *friskaz（< PIE *preysk-）であるが，OE では，一旦音位転換を起こした後，口蓋化 + 擦音化が生じ，さらに ME 期に入って，フランス語 frais の影響で「再び」音位転換を起こしたので，現在の fresh という形で継承されているのである．つまり，これは元々は「前舌母音 + <sc>」型ではなく，「/r/ + <sc>」型だったと言える．

もう一つ，Lass（1994: 59）の指摘で重要なことは，ME 期には，OE の tūsc（< PGmc. *tunþ**sk**az）から派生した tush も変異形として現れるということである．つまり，（19b）にもかかわらず，擦音化が生じる場合もあったのである．この事実は，/ʃ/ が生じるためには必ずしも口蓋化は必要ないことを示しており，俄然 Lass の（18b）が現実味を帯びてくることになる．そしてこのことは，これまでもそうだったように，いわゆる OE 形とは，(Late) West-Saxon を指し示しており，たまたまその音韻変化がそこで起こっているだけの話で，それは一介の方言形に過ぎないのであり，同様に PDE 標準形にしたところで，恣意的に選別された一方言形式として英語話者に使用されているに過ぎないことを如実に表している．標準形が tusk で非標準形が tush であるといった議論は，何ら言語の本質とは関わらないところでの議論なのである。

5　まとめ

本稿に取りかかるきっかけとなったのは，「現代英語の think に相当するものは，古英語では þencan であり，その発音は [θentʃɑn] であって，[θeŋkɑn] ではなかった」という素朴な事実に絡む，書記素 <c> の発音やその後の音韻変化への疑問であった．今回それに対する一応の回答は出せたように思う．特に，「(Late) West Saxon では，<c> を含む音節の母音が後続の音節の /i, j/ によって同じ *i*-Umlaut を起こす場合でも，『前舌母音 +（語尾の）<c>』という音韻環境では，『語頭の <c> + 前舌母音』とは違って，擦音化が起こる」という仮説は提示できたのではないだろうか．ただ，ではどのようなメカニズムで口蓋化から擦音化へと進展するのか．Lass（1994）は擦音化を Palatal Softening と呼んでいるが，「硬口蓋音を柔化する」とはどういうこ

となのかに関しては今ひとつはっきりしないし，摩擦音 /s/ が，口蓋化した [c] の直前にないときに，その [c] は /tʃ/ へと変容するという，上記（4）の児馬（1996）の説明も判然としない部分が多い．確かに，ラテン語 **c**entum ‘hundred’ の [c] からイタリア語 **c**ento [tʃ]，そしてフランス語 **c**ent [s] への音韻変化を見れば，ロマンス諸語形成において [c] > [tʃ] > [s] のような流れがあったこと自体は事実として理解できるのだが，当該の [t] は一体どこから来たのかという問題は残る．中世ラテン語（Mediaeval Latin: ML［550-1300 AD］）では，<ci> と <ti> が混同されていたという國原（2007: 37）の指摘に何らかのヒントがあるのかもしれない．

（20）ML ami**citi**a [-citj-] = ami**cici**a [-cicj-] > Italian ami**cizi**a [-tʃitsj-] ‘friendship’

また，þencan と think における，/tʃ/ から /k/ への移り変わりが示しているのは，口蓋化＋擦音化を含まない変異形が実際に方言形として存在したことと，この発音の移り変わりは音韻変化ではなく，標準形の変遷すなわち「選択」の問題であったことである．

註

* 本稿は，2016 年 9 月 17 日に熊本大学で開催された「熊本言語学談話会（KLC）」で筆者が発表した内容を加筆修正したものである．当日，熊本大学の市川雅己先生，熊本学園大学の原口行雄先生には貴重なご助言をいただいた．この場をお借りして感謝申し上げます．

1) 加えて，竹林（1996: 100）は，日本語の「鮭」が「シャケ」と発音される時，語頭子音に後続する母音 /a/ が前寄りの /æ/ で発音されるようになることも一種の口蓋化であるという．

2) カー（2002［1999］: 12）は，破擦音を「開放段階がゆるやかで摩擦を伴っているような閉鎖音」だとしている．

3) Lass（1994: 56）は，ここで言う口蓋化を Backness Accomodation (Palatalization Proper) と呼び，擦音化を Palatal Softening と呼んでいる。

4) これらのうち，PDE 標準形で，純粋に名詞のみとして機能するのは batch と speech だけであり，breach，match，stitch，watch は動詞としても機能できる。つまり，これらは動詞形として，break，make，stick，wake と二重語をなしていると言える．逆に，純粋に動詞のみとして機能するのは speak だけであり，bake，break，make，stick，wake は全て名詞としても機能できる．したがって，截然と名詞と動詞の形態的分業を果たしているのは，これらの中では speak / speech のみと言うことができる．このことから，厳密に言えば，動詞には /k/ が生じ，名詞ではそれが /tʃ/ になるという分布図は成り立たないことが分かる．

5) 動詞形には，wacian [wɑciɑn] もあった．また wæcce はさらに別の動詞形 wæccan [wætʃɑn] ‘to watch，wake’ から派生している．

6) 確かに不定詞に関しては，（9b）の通りだが，例えば，bacan の主な活用形は以下のようになっている．

（i）a. 直説法現在　**1st sg.** bace; **2nd sg.** bæcest; **3rd sg.** bæceþ; **pl.** bacaþ

b. 直説法過去　**1st sg.** bōc; **2nd sg.** bōce; **3rd sg.** bōc; **pl.** bōcon

c. 接続法現在 / 過去　**sg.** bace / bacen; **pl.** bōce / bōcen

d. 現在分詞 / 過去分詞　bacende / (ge)bacen

このように実際には，不定詞で見られたオリジナルの /k/ が後舌母音のみと共起するという事実は一部の環境でしか生起しておらず，むしろ <c> と前舌母音との共起が大勢を占める状況が現出するが，PDE 標準形の bake / baked / baked という活用の三基本形からも明らかなように，ここでの <c> は全て /k/ と発音されていたと思われる．

7) ただし，folc [folk] ‘folk’（< PGmc. *folkan）の <c> は（11d）のルールにもかかわらず，/k/ として実現される．

8) 後者は，ME では，非人称動詞 thinketh ‘it seems’ となり，PDE では，擬古的な methinks ‘it seems to me’ という形で受け継がれている．

9) 同様に弱変化動詞第 1 類に属する ræcan [ræ:tʃɑn] ‘to reach’ の場合，þū ræcest [ræ:**tʃ**est]，hē ræceþ [ræ:**tʃ**eθ] と活用し，*ræcst や *ræcþ といった /k/ を持つ形は現れず，事実 ME でも /k/ を持つ変異形はなかった（*MED*，s.v. *rechen*）．これらの現象だけから判断するならば，「<c> の前位置で *i*-Umlaut によって生成された前舌母音が /e，e:/ の場合は，口蓋化＋擦音化に至らず，/k/ を保持する場合がある」と言えそうである．

10) もともとゲルマン祖語には，/b，d，g/ といった有声破裂音の系列はなかったらしく，そのかわり有声摩擦音 /ß，ð，ɣ/ の系列しかなかったという．OE において Hardening（Lass 1994: 56）と呼ばれる音変化が起こり，/b，d，g/ が生成されたのである．

11) engel [eŋgel] ‘angel’ に関しては，<-ng-> という連鎖が /n/ ＋有声硬口蓋破擦音 /dʒ/ を表し，[endʒel] という発音であったとするものもある（デイヴィス 1978[7]［1953[9]］: 4 & 138，Baker 2007[2]: 15）．通常，OE では，/dʒ/ は <cg> という連鎖が担うことになっている．これも見ようによっては，口蓋化＋擦音化を受けた <c> /tʃ/ に，同じく口蓋化＋擦音化を受けた <g> /j/ が合体することで有声化が起こり，/dʒ/ を生成したのではないかと思われる．ちなみに，PDE では，young は [jʌŋ] と発音されるが，OE では，きちんと語末の <g> が [g] と発音されていた．

12) 書記素としては <h> を使った burh [burx] も存在する．

13)OEにおいても語中や語末では /dʒ/ は, 主に <cg> という連鎖によって実現された. 例えば, secgan [sedʒɑn] 'to say' や ecg [edʒ] 'edge' である（上註 11）も参照）. また, 現代フランス語では, 英語のようにこの破擦音 /dʒ/ は維持されておらず, /d/ が脱落し, 摩擦音の /ʒ/ だけになってしまっている. 同様にかつての /tʃ/ も /t/ が脱落し, chef [ʃef]/ のように /ʃ/ だけが発音されるようになった（ME 期のフランス語借入語である chief [tʃi:f] は当時のフランス語の発音を保持している）.

参考文献

Baker, P. S. 2007. *Introduction to Old English*. 2nd edition. Oxford: Blackwell.

カー・フィリップ. 竹林滋・清水あつ子訳. 2002.『英語音声学音韻論入門』東京：研究社.［= Carr, P. 1999. *English Phonetics and Phonology*. London: Blackwell］.

ディヴィス・ノーマン改訂. 東浦義雄注. 1978.『H. スィート古代英語文法入門』第 7 版. 東京：千城.［= Davis, N. (rev.) 1953. *Sweet's Anglo-Saxon Primer*. 9th edition. Oxford: Oxford Univ. Press］.

Hall, J. R. Clark. With a supplement by H. D. Meritt. 1960. *A Concise Anglo-Saxon Dictionary*. 4th edition. Toronto: Univ. of Toronto Press.

Hogg, R. 2002. *An Introduction to Old English*. Edinburgh: Edinburgh Univ. Press.

Horobin, S. 2010. *Studying the History of Early English*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.

堀田隆一. 2009. 英語史ブログ #49（June/16/2009）/k/ の口蓋化で生じたペア http://user.keio.ac.jp/~rhotta/hellog/2009-06-16-1.html (Accessed August/18/2016).

児馬修. 1996.『ファンダメンタル英語史』東京：ひつじ書房.

國原吉之助編著. 2005.『新版中世ラテン語入門』東京：大学書林.

Kurath, H. et al. (eds.) 1956-2001. *The Middle English Dictionary*. Ann Arbor: The Univ. of Michigan Press.

Lass, R. 1994. *Old English: A Historical Lingusitic Companion*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.

松瀬憲司. 2011. Get/Give/Take・句動詞・ヴァイキング.『熊本大学教育学部紀要人文科学編』, 60, 81-90.

Murray, J. A. H. et al. (eds.) Prepared by J. A. Simpson & E. S. C. Weiner. 1989. *The Oxford English Dictionary*. 2nd edition. Oxford: Clarendon Press.

Quirk, R. & Wrenn, C. L. With a Supplemental Bibliography by S. E. Deskis. 1994 [1957[2]]. *An Old English Grammar*. 2nd edition. DeKalb: Northern Illinois Univ. Press.

Schreier, D. 2005. *Consonant Change in English Worldwide: Synchrony Meets Diachrony*. London: Palgrave Macmillan.

Smith, J. J. 2009. *Old English: A Linguistic Introduction*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.

竹林滋. 1996.『英語音声学』東京：研究社.

寺澤芳雄編. 1997.『英語語源辞典』東京：研究社.